

東彼杵 グラフ

10 / 23 郷 蔵本郷

32 アールのハウスでびわを栽培する滝川泰展さん・邦洋さん親子



古くから地域に息づく食文化や伝統。
時代のスピードに流されず、ゆっくりと歩む人たち。
多くの人に幸せをもたらす観音さまでは
癒しのひと時を過ごした。

制作 地域おこし協力隊
文 飯塚将次
写真 堀越一孝
編集・デザイン 小玉大介

東彼杵町は“クジラのまち”。移住してからクジラと接する機会がぐんと増えた。江戸時代、鯨組の深沢儀太夫勝清が彼杵港に鯨肉を陸揚げしたことに始まる町のクジラ文化。今でもあちこちでクジラの看板やのぼりを目にし、イベント時には鯨肉を売る屋台があり、ハレの席の鉢盛ではさまざまな部位の刺身が主役を飾る。

JR 彼杵駅近くの彼杵鯨肉では毎月1回、鯨肉の入札会が行われている。彼杵港に集められた鯨肉は、日中戦争の頃から地元の問屋や仲買人で作られた任意組合が水産会社と取り引きしていたが、太平洋戦争時の食品統制令により長崎県鯨肉配給組合での取り扱いとなり、昭和25年に彼杵鯨肉が引き継いだ。

この日は第796回の入札会。月1回と計算すると60年以上も続いていることがわかる。昼前に業者が集まり、みんなで2階に上がっていく。入札の日は昼食を食べながら情報交換するのが慣わし。私たち3人もお相伴にあずかった。大皿に山盛りの湯かけクジラ、みそ汁の中にもたっぷり入っていた。クジラでお腹いっぱいになったのは初めてだ。「昔は熊本や

北九州などからも業者さんが来ていました。自分のところにはないクジラが買えるから」と板谷久美子さん。酒を出すこともあってそれは賑やかだったと言う。

外に出ると、番号札の置かれたブロック状の鯨肉がずらり。ミンク、イワシ、ニタリなど鯨種の部位ごとに1～25番まで並べられていた。ここで取り引きされる鯨肉は、調査捕鯨の副産物。クジラの代金は調査経費の一部に充当される。

「21番がミンクの皮の徳用です。22番が…」とスタッフの野田勇さんが番号順に読み上げ、業者は入札したい番号と金額を書いて木箱に入れていく。「業者さんによって欲しい鯨肉は違う。ここぞという時には1円、5円を上乗せして入札することも。プロの技だよ」と社長の板谷康司さん。

商業捕鯨が中止され、国内の鯨肉需要も低迷している。毎月通う業者もだいぶ減ってしまったが、「業者さんが来てくれる限り辞めません。その先には食べてくれる人がおるわけやから」と康司さん。やさしい笑顔の中にも、クジラ文化を守っていく力強さを感じた。



↑ 業者が品定めしやすいよう、鯨種・部位別に並べられる



↑ 番号と品名、金額などを書いて入札に参加



↑ 業者が決まると、赤マジックで大きく記される

長崎街道を歩く。JRの踏み切りを渡ってすぐの所にある町田商店に入った。店頭には誰もいないので、奥に向かって声をかける。「は〜い!」と元気な声が、意表をついて地下から。「作業場になっている」と町田きよみさん。古い木枠のガラスケースにカステラはない。棚にきらびやかな装飾の瓶が並んでいた。これが現在の主力商品。

「砂糖瓶と言います。お葬式の後、初七日から四十九日の間に親族や知人らがお供えするもので、かつて大村藩だった街道沿いでよく見られる風習なんです」ときよみさん。瓶を見せてもらうと、角砂糖や袋入りの上白糖がたっぷりと入っていた。

江戸時代、長崎は外国との唯一の玄関口だった。長崎街道を通じて多くの人とモノが行き交う中、当時は貴重な砂糖も各地へ伝播した。近年では、絹を運んだ道＝シルクロードにちなみ、砂糖を運んだ道＝シュガーロードとも呼ばれている。街道沿いに南蛮菓子が伝わり、砂糖もふんだんに使われるようになり、菓子文化が花開いた。

東彼杵町に当時の銘菓はないが、砂糖を大切なものとして、砂糖瓶を供えるという風習がわずかに残った。貴重だった砂糖を瓶一杯に詰めて、祭壇に飾り、故人の遺徳を偲ぶ。四十九日の法要を終えた後は砂糖を分けて引き出物として配る。

町田商店は和洋菓子店として創業して60年以上。きよみさんが義理の父から引き継いで17年ほどが経つ。「父は“鯨の潮吹き”という菓子が有名な長崎のお店で修業をしました。カステラや丸ぼうろ、ブランデーケーキなどどれもおいしかった」ときよみさんは話す。長崎の百貨店を辞めて店に入り、父の仕事を手伝うようになったきよみさん。職人氣質の父は菓子づくりの重要なところは人まかせにできなかった。見よう見まねで始めて、父の域まで達することができたのが砂糖瓶だった。「もうせんでよか」と最期に言われたが、古くからの風習だけに残していきたい。「配達はできんようになるけど、90歳ぐらいまでは作り続けたい(笑)」と明るく、強く話してくれた。



↑ 砂糖を組み合わせでデザインする砂糖瓶



↑ みかんの収穫は年末がラストスパート



↑ 江戸時代に建立された観音堂。裏には滝が流れる



↑ 今年最後となる 12 月 17 日。地区の女性たちが集まってお題目を唱えた

雪が舞い散る中、滝の観音へ向かった。ここは協力隊の 3 人ともが好きな場所のひとつ。町道から 20 分ほど登るだけで静寂に包まれた別世界となり、とても癒される。お堂の裏には岩の間から高さ 27m の滝が落ちる。参道から大村湾の眺めもいい。滝川初夫さんの話では、「昔は滝行をする僧侶もおったそう。最近までは子どもたちの遊び場で、ウナギやツガネもいっぱいおった」とのこと。奥さんの多知江さんも、「自然の石でできた小川があって、そこにスイカや麦茶を冷やしたり。8 月 17 日の千灯籠では屋台も並び多くの人で賑わいました」と続く。今以上に素敵な情景が浮かぶ、たくさんの思い出話を添えて教えてくれた。

滝の観音は、古くから滝川内地区で大切にされている。毎月、水やシバを新しいものに代え、清掃もきちんとして行く。いつ訪れても心地よいのはそのためだ。観音さまへの信仰心も強い。「古くからここに住み、先祖代々でお守りしてきました。毎月 12 日は地区が上下に分かれ、お題目を唱えて家をまわります。そして、17 日にはみんな一緒になってまわり、年の最後には観音さまに登るんです」と滝川みつるさん。

※ 蔵本郷へは、町営バス「彼杵本町」「彼杵駅前」「彼杵中学校前」「島田」、JR 九州バス「彼杵駅前」「彼杵本町」のいずれかのバス停を利用。

羊年は遠目郷からです。お楽しみに！

お堂の観音菩薩像はさまざまな信仰があるが、地区外の人には子授けでお参りする人が多いそうだ。「何十年、子どもができなかった人にも授かった」「町外からもお礼にくる」と異口同音に話す。小さな石橋を渡れば鬼子母神も祀られ、こちらは安産や子育ての神様。滝の観音はそこにいてパワーをもらえる気がするのに、話を聞くとご利益もいっぱいだった。

蔵本郷のいたるところでたわわに実っていたはずのミカンの木々が、どこもすっきりしていたことに気づく。ビニールハウスを覗けば、小さな青いビワの選別が慌ただしく行われていた。年が明けて、日本一出荷が早いとされる早生品種のびわの箱詰めが始まれば、春はもうすぐだ。



↑ 観音堂の前でじっくり記念撮影